

ム変更が行われた。スタッフもメンバーの一員として一緒に DC の問題を考えていこうという趣旨の下、平成 2 年 3 月より合同運営会議が 3 カ月に 1 回開始された。又、DC の活動内容、実践を多くの家族に知って貰おうとメンバーの声を盛り込みながら DC 通信を発行している。平成 4 年 3 月より病期の理解を深め、家族がもっと病院に近づき、家族同志の交流を深めるという目的で念願だった家族の集いを開く事が出来た。ケースを紹介しながら、今後どのように DC を進めていったら良いのか、DC の担う役割、期待されるもの、地域とのつながり等考えながらメンバー、家族と共に歩んでいきたい。

まとめ：登録外の人も含めると 60 数名のメンバーが通中、発足当初より参加の仕方、目的、ニーズ等随分多様化してきた。どのようにしたら自主性を尊重しつつやすらぎの場を保障し、生き生きとした DC に出来るか。試行錯誤しながらメンバー・スタッフ共々頑張っているのが現状である。

就職だけでなく社会で生きること、それも 1 つの社会復帰といえる。私達は多様化されてきているメンバーのニーズを受け入れ、その人のペースで病状、情緒安定を図り安定したゆとりある社会生活が出来る事を願っている。そしてより多くの人の参加を望んでいる。

することを患者さんに慣れて貰います。また病院外の患者さんや家族との交流を促進するようにします。

つまり、やや理念的ですが、地域に近づくことと、自由の拡大・主体性回復の享受へのささやかな一歩と言えるでしょうか。

また、地域に復帰するための訓練として、或いは退院後の抛り所・居場所としてデイケア・院内有給作業の準備・開設があります。

訪問看護では、患者の病状や生活障害の程度・家族状況などを把握し、生活支援・精神的支援・家族支援などを目指します。

障害者年金や生活保護の受給、保健所の訪問指導・デイケア、作業所への通所など、出来るだけ社会資源の活用を計ります。

以上のような活動によって、“院内寛解”、つまり疾患そのものより、その疾患からくる生活障害および社会的ハンディキャップなどによって病院生活を余儀なくされている人たちの幾分かを地域に戻し、そこで安心して生活できるように、ある程度なったかと思えます。

## 第 235 回新潟外科集談会

日 時 1992 年 12 月 5 日 (土)

午後 1 時

会 場 新潟大学医学部第 3 講義室

### 17) 中条病院精神科の社会復帰在宅ケア支援システム

—退院のさせ方、支え方—

山下 正広・須賀 良一 (厚生連中条病院)  
滝沢 恭二 (精神科)

いわゆる院内寛解の患者さん達を、どのようにしたら地域に戻すことができるか、地域に戻した後はどのように支え再発を予防するか。それも出来る限り家族への負担を少なくして、というのが私たちの課題でした。

そして、その解決を工夫する過程で一つのシステムが生み出されました。

まず、病院家族会での活動があります。家族の希望・不安を汲み上げるようにします。また病気の理解を深めるための学習会を開いたり、地域医療の現状や病院の取り組みを説明します。特に、家族になるべく負担をかけない、再入院にならないように出来るだけのことをする、緊急時はすぐに対応する、を繰り返します。

病棟内では、出来る限りの“地域に開かれた病棟づくり”を志します。鍵を外すことを前提として、お金・時間の使い方、薬の内服、日々の行動を自分で管理・決定

### 1) 臍体尾部欠損症に胆石症を合併した 1 例

河内 保之・岡村 直孝  
羽賀 学・若桑 隆二  
広田 雅行・田島 健三 (長岡赤十字病院)  
和田 寛治 (外科)

臍体尾部欠損症は希な疾患であり、本邦では 1991 年までに 74 例の報告がある。今回、我々は本症に胆石症を合併し、手術によりこれを確認した症例を経験したので報告する。

症例は 47 歳の男性で、1990 年胆嚢炎および膵炎を契機に CT で臍体尾部欠損症を指摘された。1992 年 4 月再び膵炎および胆石症で入院した。ERCP では膵管は滑らかに途絶しており、副膵管及び副乳頭は認めなかった。アルギニン負荷試験および 75 g OGTT では、インスリン分泌は基礎値、反応ともに低かった。胆石症に対しての手術時の所見では、臍体尾部には脂肪組織が存